

化学物質の性状に関連の強い労働災害の分析（茨城県内）

1 化学物質の性状に関連の強い労働災害の発生状況

・化学物質の性状に関連の強い労働災害(事故の型が有害物等との接触、爆発、火災によるもの)は、直近10年間で10～20件前後で推移しており、令和7年は過去10年間で最も多く発生。
・死亡災害は過去10年間で、有害物等との接触、爆発、火災でそれぞれ2名ずつ発生している。有害物等との接触による死亡災害は、充満する有害物質を吸引した急性中毒、マンホール内での一酸化炭素中毒である。

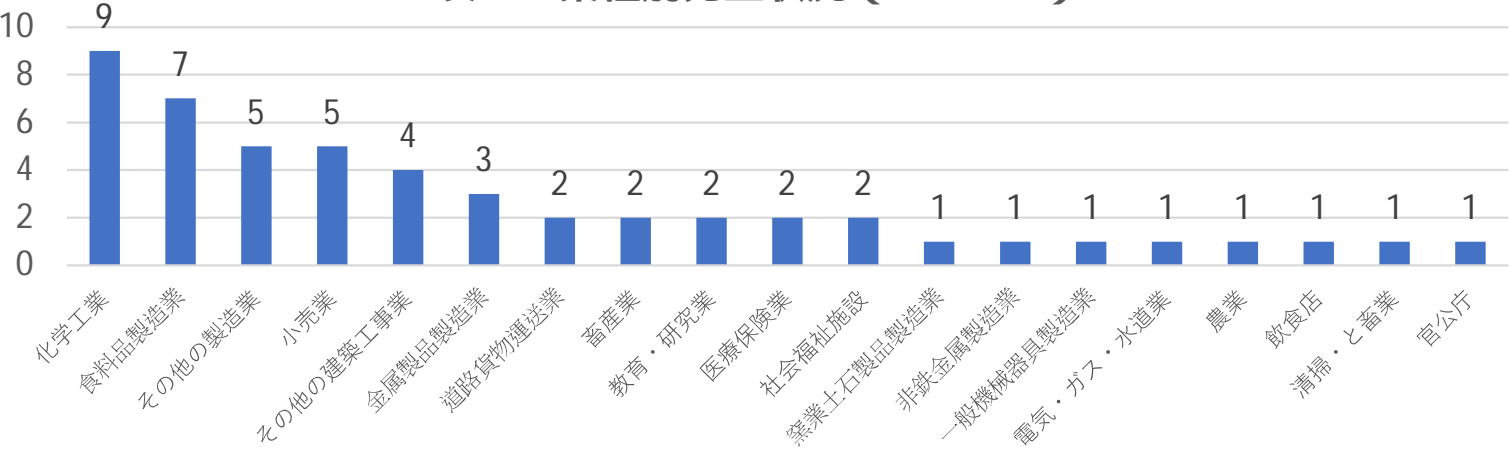
表1 化学物質起因の死傷者数（休業4日以上で過去10年間に発生したもの。括弧書きの数は死亡数。）

事故の型	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年	計
有害物等との接触	6	23 (1)	10	19	12 (1)	4	18	16	11	24	143 (2)
爆 発	2	1	2 (1)			1		2	3 (1)		11 (2)
火 災	3		1 (1)	2	2	2	2	1	1	1 (1)	15 (2)
合 計	11	24 (1)	13 (2)	21	14 (1)	7	20	19	15 (1)	25 (1)	169 (6)

2 有害物等との接触による労働災害の分析

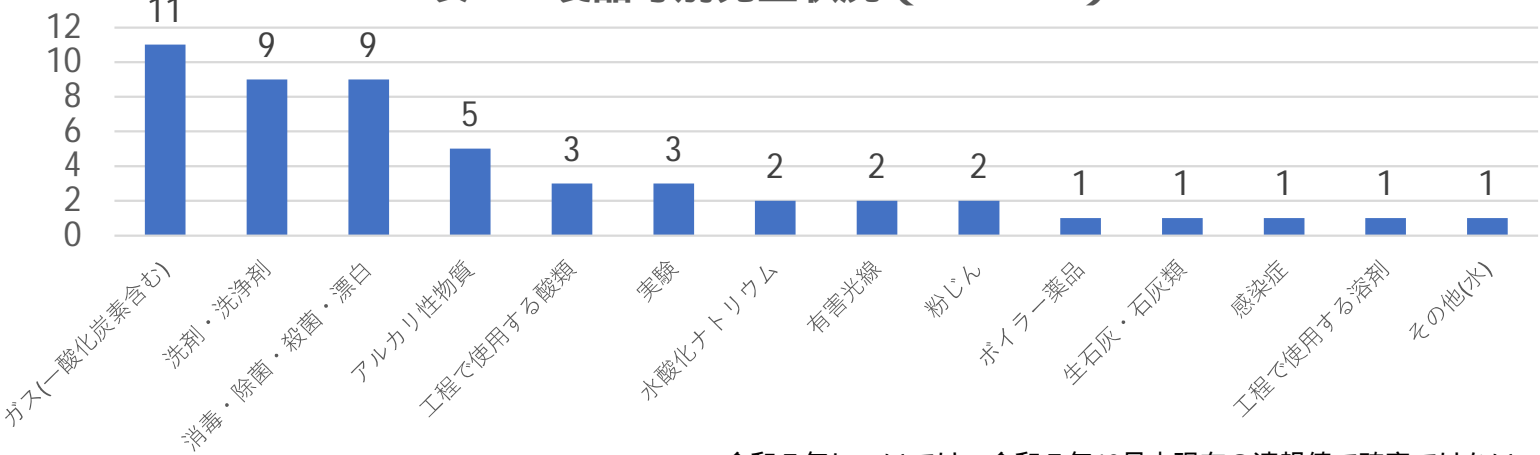
・有害物等との接触が最も多いことから、業種別の災害を表2に記載。
・化学工業、食料品製造業など、製造業で多く発生している一方で、小売業、道路貨物運送業などでも発生している。

表2 業種別発生状況（R5～R7）



・どのような製品との接触で労働災害が発生したのか、内訳を表3に記載。
・一酸化炭素を含むガスが最も多く、建設工事での発電機や飲食店でのガスが原因となっている。次いで、洗剤・洗浄剤と消毒・除菌・殺菌・漂白剤での災害が多い。これらは床面や機械の洗浄作業での発生が多く、農業においては地盤消毒に使用した薬品での被災する災害が発生している。

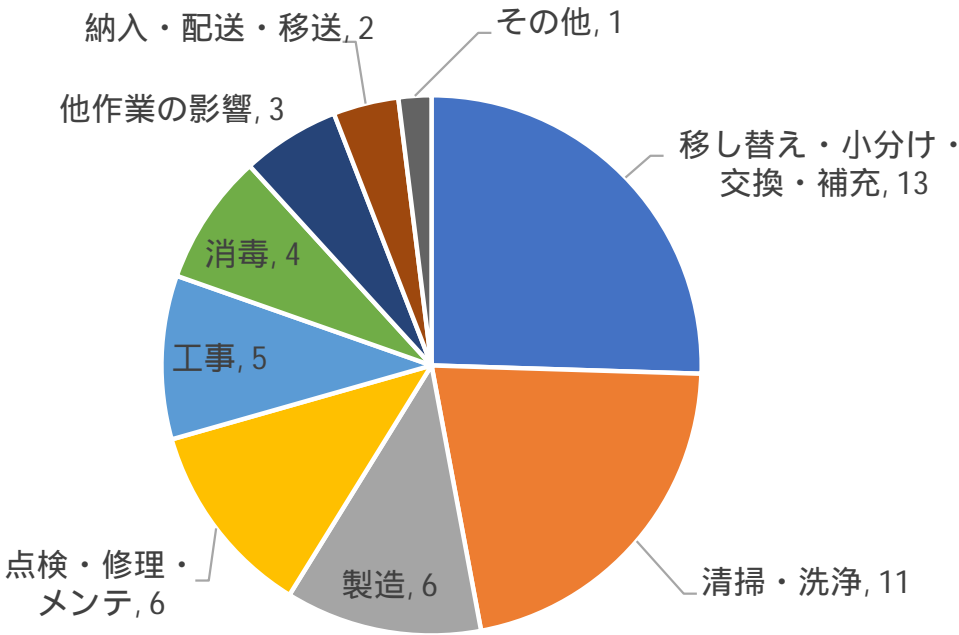
表3 製品等別発生状況（R5～R7）



令和7年については、令和7年12月末現在の速報値で確定ではない。

・どのような作業において労災事故が発生したか内訳を表3に記載。
・最も多いのが、「移し替え・小分け」など少量の化学物質を扱う作業で発生しており、次いで「清掃・洗浄」となっている。いずれも、保護具などの対策や作業者の認識不足に起因して発生していると思われる。

表 4
作業別の災害発生
状況（R5～R7）



3 令和7年の災害事例

作 業	傷病部位	傷病名
災害発生事例		
物の焼却	全身の複数部位	熱傷性ショック
一斗缶に刈り取った草を入れて火を点けたが、火力が弱かったため、ラッカーシンナー（第2種有機溶剤）を火元に注いだところ、激しく燃え上がり、その弾みで被災者に燃え移り、熱傷性ショックにより死亡した。		
清 掃	手首、肩、背中など	薬 傷
積荷（生石灰）の積み込みを終え、作業終了後にハッチの清掃をしていたところ、保護具の隙間から生石灰が入り込み、汗と反応した生石灰で薬傷を負った。		
小分け	足 指	火 傷
粉原料（強アルカリ性物質）を小分け用原料袋に軽量しながら充填していたところ、作業衣に付着した粉原料が長靴内に侵入し、吸湿と汗で足指のつま先付近を化学熱傷により火傷した。		
製 造	眼	角膜裂傷
鉄筋加工のため、工場内でサンダーかけをしていたところ、ゴーグルをしていなかったため、鉄粉が眼に入った。		
点 検	眼	薬 傷
排出弁が詰まり、配管の接合部を緩めたところ、中和剤として使用していた苛性ソーダ（水酸化ナトリウム）が弁から噴出した。汚泥の確認のため、ゴーグルを外していたため、跳ねた苛性ソーダが眼に入った。		
消 毒	呼吸器	薬物中毒
トラクターに乗り、土壌消毒をしていたところ、方向転換した際に後部に積んでいた薬品の瓶が落下して割れてしまい、揮発した薬品を吸入した。		